



- 所長挨拶 ～続 森林の好循環利用に向けて～
- 知識の泉(森の話/木の話)
- 究める／広める／育てる(業務最前線)
- 自然彩々(センターの四季/生き物たち紹介)
- 楽／学広場(イベント・研修会)



続 森林の好循環利用に向けて

宮城県林業技術総合センター所長 永田一朗

東日本大震災から2年2ヶ月が過ぎ、県内各地で復旧作業が進んでいます。県では今年を復興に向けて「発展の種をまく年」とし、沿岸部を中心に、被災者の生活再建、地域経済の立て直し、原発事故対応などにスピード感を持って取り組むこととしています。

当センターも森林・林業・木材産業に関わる実用的な試験研究と技術開発、それらの成果の現場普及等を通して、地域林業の振興と震災復興に資するよう努めて参ります。

さて、日本人は、建築などの材料、薪などの燃料、木の実などの食料・薬品、落葉などの肥料として、縄文時代の昔から森林を資源として使ってきたことで、個々の木材の特性を活かしつつ、様々な用途に無駄なく利用するという生活文化（「木の文化」）を育んできたといわれていますが、反面、木材の加工し易さから、農耕を基盤とした古代国家の成立や、江戸時代の人口増加、明治時代の近代化の産業振興、さらには昭和時代の戦争とともに、旺盛な木材需要が森林を荒廃させた過去もありました。

しかし、日本人は、森林の荒廃がもたらした自然災害の教訓から、「治山治水」の考えで、その都度、森林を再生させてきました。

特に、太平洋戦争時は、森林が国内で調達可能な自前の資源であることで、相当に森林が伐採され荒廃したことから、戦後の国土復興に向けた国民運動として、昭和25年に第1回「植樹祭」が山梨県からスタートし、本県も昭和30年の第6回植樹祭を当センターの現在地でもある大衡の地で実施しています。今年で64回となる植樹祭は、日本人が継続している森づくり（再生）の一つの表れだと思います。

このような関係者の弛まぬ努力によって、今日の日本の森林は、伐採量を上回る蓄積量を有する、循環利用に適した資源になっていますが、それらの森林の多くは、川上の先人達が植え育てた人工林であり、今後、川下の国産材需要の低迷で下刈り、間伐、再造林などの管理が放置されると、森林全体の林齢構成や資源量などのバランスが崩れ、木材生産機能や国土保全等の公益的機能の発揮が危ぶまれる「新たな森林の荒廃」を招きかねない現状にあります。

このように豊かさと不安要素を抱えた日本の森林の持続的な経営のためには、このままでは森林荒廃への道を再び進んでしまうという危機感を持って、歴史を踏まえた森林と人間生活の深い関わりを再認識し、「新たな国内需要」の開拓が求められるところです。

そのようなことから、平成22年の「公共建築物等木材利用促進法」、平成24年の「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」、今年の「木材利用ポイント事業」などの強い政策誘導で地域材（国産材）の利用が推進され、森林を伐って、植えて、育てて、伐ってという利用の好循環がより一層維持され、安全で安心な県民生活と震災復興が目に見えて進むよう期待するものです。



知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすく
ご紹介します。

★「松島や ああ松島や 松島や」のマツは何マツ？

日本三景の「松島（まつしま）」は、多くの島にマツが生えていることに由来する名前ですが、さて、そのマツは、何マツなのでしょう。

日本には、二葉松のアカマツ、クロマツ、リュウキュウマツと五葉松のヒメコマツ、チョウセンゴヨウマツ、ハイマツ、アマミゴヨウマツの7種類が分布していますが、松島で見られるマツは、二葉松なので、アカマツかクロマツのどちらかです。アカマツやクロマツは、ほかの樹木が育つことのできない乾燥がちな痩せた土地でも生育することができる特徴があります。

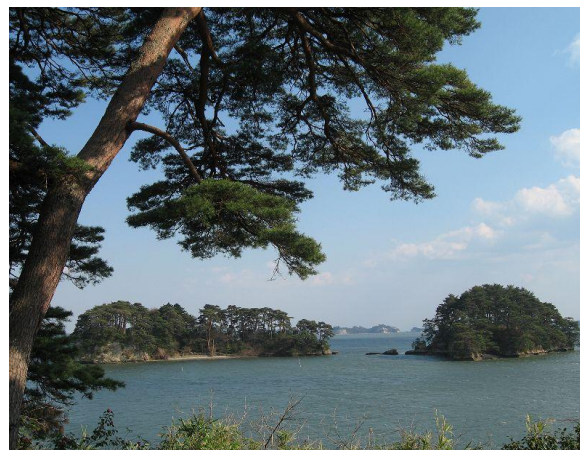
特にクロマツは、潮風にも強く、低地で潮水が進入するような湿地にも耐えて生育するので沿岸部に多く分布しています。飛砂、潮風などを防ぐために海岸に沿って造成された海岸林は、厳しい条件でも生育できるクロマツの特徴を生かしたものです。一方、アカマツはクロマツに比べて寒さにより強く、内陸部から沿岸部まで広く分布しています。

一般的には、沖合の小島や潮水が上がる水際沿岸にはクロマツが優勢し、水際から離れるにつれてアカマツが優勢して分布しますが、東北地方は寒さが厳しかったためか、クロマツに代わってアカマツが海岸線まで分布しています。

松島のマツの分布を観察すると、^{したいかん}五大堂や観瀾亭付近などに数本のクロマツが見られますが、そのほかは圧倒的にアカマツが優勢です。「四大観」の眺めから見えるマツも沖合の小島のマツも浸食された崖にあるマツもほとんどがアカマツです。クロマツは海岸線沿いを探せば見つかる程度なので、松島のマツは、ほぼアカマツと言っても良いでしょう。



切り立った岩場にもアカマツ（福浦島）



沖合の小島にもアカマツ

マツと言えば、白砂青松、庭園の松、正月の門松など、日本人に最もなじみ深い樹木のひとつです。常緑樹で、緑の葉を落とさないことや長寿であることなどから、縁起が良いとされ、繁栄を願って人の手で植えられたものから実生で自然に生えたものなど、私たちの周りには実に多くのマツがあります。

これらのアカマツとクロマツは、樹皮や冬芽の色から見分けることができますが、実物を目にする判断に迷うことがあります。簡単な見分け方に、手のひらに針葉の先端を当ててみる方法があります。クロマツの針葉は固いので、手のひらが痛くなりますが、アカマツの針葉は柔らかく、痛くならないので容易に判断ができます。

松島の「マツ」の分布やみなさんの身近にある「マツ」が「アカマツ」なのか「クロマツ」なのか調べてみると新たな発見があるかもしれませんね。

さて、当センターの「マツ」と言えば「抵抗性クロマツ」です。松くい虫被害に抵抗力があり、東日本大震災による大津波で壊滅的な被害を被った海岸林の再生に向けて、種子や挿し木苗の増産・供給体制をさらに加速しています。クロマツが持つ本来の特質に加え、松くい虫被害に強い実力を遺憾なく発揮し、健全な海岸林に成長して欲しいと願っています。

【普及指導チーム 森 誠司】

★ 苦味は春のお告げ？

当センターは、ツキノワグマが目撃されることもある豊かな自然の中にあります。冬眠から目覚めたツキノワグマは、体の中の老廃物を排出させるために、まず最初に苦いものを食べるのだとか。なぜか私たちも春は苦みのある山菜を食べたくなりますが、何か関係があるのでしょうか。

当センター内の研究フィールドにもあり、早春にいち早く花を咲かせる、「苦いもの」ふたつを紹介しましょう。どちらも仲間を増やすタネの散布に工夫があります。

◎ セリバオウレン【芹葉黄連】(キンポウゲ科)



オウレンの群落 3月に開花

花茎は10cmほど

花後は花茎を伸ばします

袋果と種子

北海道、本州、四国に分布し、山地の木陰に群生する多年草です。根茎は古くから胃腸薬などに利用され、薬用植物として知られています。

早春に他の草本に先駆けて花を咲かせます。10cmほどの花茎を上方で分岐させ、3つの白い花を咲かせます。花は雄しべと雌しべがある両生花と雄しべのみでタネの成らない雄花の2種類があります。両生花の花後は茎が伸び、車輪状の袋果(たいか)になります。5月にはタネが熟し、風で揺れると袋果の先端からタネがこぼれ落ちます。

開花時に比べて花後は花茎を伸ばしますが、遠いところへの散布はできず、親株周辺への散布になります。親族で群落をつくり、仲間同士で暮らしたいと思っているようです。

◎ フキ【蕎】(キク科)



ふきのとう(蕎の臺)の多くは雄株

雄花

雌花(白・紫)

花茎を伸ばして綿毛を飛ばします

日本全国に分布し、樺太、朝鮮半島、中国大陸でも見られます。早春に土の中から顔をのぞかせる「ふきのとう」は、真っ先に春を告げる山菜で、独特の苦みや香りに人気があります。

「ふきのとう」はフキの花ですが、よく見てみると雄の花と雌の花があります。フキは雌雄異株(しゅういしゅ)とし、雄株と雌株を分けて、自家受粉を巧みに避けているのです。

花後は茎を伸ばし、45cmほどになります。綿毛の付いたタネを風にまかせて、我が子をできるだけ遠くに運ぶ作戦です。かわいい子には旅をさせて遠い所での自立を願っているようです。

花茎が伸びて、食べ頃を過ぎたものや盛りを過ぎて役に立たなくなったものを「臺が立つ」などと言いますが、フキノトウの伸びた花茎は、フキと同じように食べられるので、臺は立ちますが役に立つのです。

【普及指導チーム 森 誠司】



究める／広める／育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成（研修）業務の最前線をご紹介します。

★ 平成25年度林業試験研究のあらまし

◎ はじめに（基本方針）

「森林・林業再生プラン(林野庁：H21)」の実現に向け、集約化施業や生産基盤整備等への取組が精力的に進められる中で発生した東日本大震災は、沿岸の木材加工施設や海岸防災林等に対する壊滅的な被害ばかりでなく、放射能汚染など将来に及ぶ極めて深刻な被害ももたらしました。

県は、震災直後から「みやぎ森林・林業の震災復興プラン」を策定して被害の復旧と関連産業の再生に向けた取組を加速させてきており、関係者の努力もあって一部では復旧・改善がなされつつありますが、本格的な復興はまだこれからという状況です。

今後、復興対策を効果・効率的に進めていく上で試験研究の果たす役割はますます大きくなっていくものと思われます。このため、当センターでは、震災復興プランの推進に資する研究開発や技術支援等に最優先で取り組んでいく考えです。併せて、復興後に必要とされる育種・育林等の基盤的研究についても、継続的かつ着実に進めてまいります。

◎ 重点研究分野と主な研究課題

【森林・林業・木材産業のサプライチェーンの復興に寄与する技術の開発】

1. 原木しいたけ生産実証試験及び放射性物質の移行等に関する基礎調査

放射能汚染被害を被っている原木しいたけ生産の再開に向け、ほだ場の環境改善や放射性物質の移行実態などについて調査を行う。

2. 木材への放射性物質の影響に関する調査

県内の森林における放射性物質の流木への移行・蓄積状況などを明らかにする。



しいたけの原木栽培

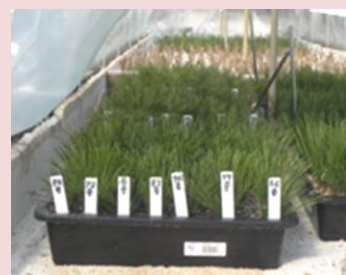
【被災した海岸防災林の再生と県土保全の推進に寄与する技術の開発】

1. クロマツ苗の無性繁殖による大量増殖技術の開発

震災で被災した海岸防災林の再生に向け、マツ類では困難とされる「さし木」による松くい虫抵抗性クロマツ苗木の大量増殖技術等を開発する。

2. 海岸林造成に向けた広葉樹の育苗技術に関する研究

被災した海岸林再生の一端を担う広葉樹について適性等を把握するとともに、マルチキャビティコンテナを用いた育苗技術等を確立する。



抵抗性クロマツのさし木試験

【木質バイオマスの多角的利用モデルの構築に寄与する技術の開発】

1. 木質系バイオマス資源の供給可能量に関する調査

木質バイオマス利用の需給実態や未利用木質バイオマス資源の発生量及び利用量等を調査し、地域における供給・調達システムの構築等に資する。



木質ペレットに利用される林地残材

【企画管理部 松野 茂】

★ 優良な種や苗は林業技術総合センターから

種から山行苗になるまでには、様々なステップがありますが、そのスタートラインでは林業技術総合センター（以下、「当センター」という）における育種研究や種苗生産の技術が生かされています。



◎育種研究により、抵抗性クロマツや少花粉スギ等の品種がうまれています

育種とは、生物の遺伝質を改善して「新品種」をつくり出すことです。

当センターでは、マツノザイセンチュウの被害に抵抗性を持つクロマツ及びアカマツの育種研究を平成4年度から20年間続けてきました。これまで抵抗性クロマツ7品種、抵抗性アカマツ6品種が国の認定を受けています。

また、スギについては生長、形質がともに特に優れた精英樹の育種研究を行っています。この歴史は古く、始まりは昭和28年度に遡ります。これら精英樹のうち、平成8年度からは花粉症対策として少花粉スギや低花粉スギの育種研究が始まり、これまで7品種が国等の認定を受け生産を進めています。

◎年間7万5千本のスギ精英樹を種苗生産しています

育種研究でうまれた優良な性質を持つ品種のうち、少花粉及び低花粉のスギ品種を種苗生産しています。

苗を育てるには、種から育てる方法と挿し穂から育てる方法（さし木増殖^{※2}）があります。当センターでは、後者の方法で年間7万5千本のスギ精英樹を種苗生産しています。春には以下のような作業があります。



採穂園から挿し穂を採取



切り口のヤニを除去



発根促進剤を塗布



挿し床に挿し付け



散水や消毒管理をして増殖



生長した挿し木を床替え^{※3}

※1 採穂園：精英樹や新品種により造成される遺伝的に優れた種子・穂木を大量かつ安定的に生産する施設。

※2 さし木増殖：採穂園の親となる木から穂を切りとり、挿し床（当センターではパーライト）にさして苗を育てる方法。

※3 床替え：苗木の生長に応じて必要な日光と空間を十分に与えて根茎の発達を促すため、挿し木を挿し床から苗畑へ移植する作業。

◎海岸防災林の再生に向けて、抵抗性クロマツの採種園を増やしています

本県では、抵抗性クロマツの種子を採取する「採種園」0.39haの指定を受け、平成22年度から種子生産を開始しています。東日本大震災により被災した海岸防災林復旧のために、抵抗性クロマツの苗木が大量に必要とされていますが、そのためには種子を大量に生産する必要があります。そこで、当センターでは、現在、0.3haの抵抗性クロマツ採種園を新たに造成しています。海岸林再生に向けたクロマツの研究について、詳細はメッサ第28号をご覧ください。



抵抗性クロマツの球果



抵抗性クロマツ採種園を新たに造成中



◎海岸防災林の再生に向けて、広葉樹苗木の育苗技術を研究しています

東日本大震災により被災した海岸防災林復旧のために、海側の最前線はクロマツの植栽が最適ですが、内陸側には、広葉樹も植栽することを検討しています。震災後、被災した海岸防災林の生存木を調査し、適応性や植生分布、種子の確保の優位性などを検討した結果、コナラ、ヤマザクラ、ケヤキ、クリなどが適しているものとされました。

これらの樹種は元々宮城の里山に自生していたにも関わらず、苗木の需要がなかったために、生産実績が少なく育苗技術も確立されていません。

このため、現在、採取可能な広葉樹種子を確保し、マルチキャビティコンテナ、ポット、苗畑を利用して育苗技術の開発に取り組んでいます。種類はコナラ、クリ、クヌギ、カシワ、トチノキ等で、現在、発芽率や成長率を調査しています。5月になり発芽が活発になってきています。6月には次年度に向けたサクラ類の種子採取が始まります。今後も適宜状況をお知らせします。

コナラの発芽状況
(マルチキャビティコンテナ)クリの発芽状況
(ポット)トチノキの発芽状況
(苗畑)

参考文献

海岸防災林に適した植栽樹種に関する調査報告書，宮城県森林整備課，2012

【企画管理部 河部 恭子，大内 環】

★ 木質外構材をより使いやすく、より安全に

木材を屋外で使う際には、経年劣化の把握が重要です。紫外線、長時間の降雨、そしてシロアリなどの昆虫が劣化の主な原因となります。紫外線は木材の主要成分のひとつリグニンに吸収され分解溶脱を促進し表面を灰色化させ、また雨水が長時間溜まると腐朽菌が生息しやすくなるのです。劣化状況に応じ補修等のメンテナンスを適切なタイミングで行うことで、低コストで長く、そして安全に使い続けることができます。

現在行っている研究「木質外構材の機能性・耐久性向上に向けたメンテナンス手法の開発」では、多くの人々が使用するウッドデッキやあずまやなど「木質外構材」の設置・管理状況の調査を行うほか、センター内に設置した木製ベンチを定期的に調査し、点検の方法や劣化状況の判断の仕方を明らかにします。結果については来年度にメンテナンス指標や管理マニュアルという形で取りまとめ、お知らせします。



腐朽により座面が破損したベンチ
雨がかりの環境におかれたため腐朽が進んでしまいました

【地域支援部 玉川 和子】



自然彩々

地域のオアシスでもあるセンターの四季折々の自然や、センター内に生息している野生生物たちをご紹介します。

★ 春の水辺に咲く金色の花-リュウキンカ-

雪が消えた殺風景な沢沿いの水辺に、鮮やかな黄金色の花が咲き始めました。キンポウゲ科の多年草のリュウキンカです(写真1)。濃い緑色で腎円形をした根出葉は、直径が5~10cmで、縁には鋸歯があり長い柄を持っています。その間から10~50cmの中空中で直立する茎を伸ばし、先端に直径約2cmの黄色い花を2~3個つけます。花には、5~7枚の花弁に見えるガク片、多数の“おしべ”と4~12本の“めしべ”があり(写真2)、果実は袋果で1cm程になります(写真3)。和名は直立する茎に黄色い花をつけることから“立金花”と書きます。本州や九州の溪流や湿地でみられ、山地の湿原ではミズバショウなどと大群落を形成するところもあります。当センターでは沢沿い約150m間に点々と見られ、花は4月中旬から咲き始め5月末までみられます。県内でも1960(昭35)年頃までは、仙台市の郊外の丘陵地の湿地でサクラソウなどとともに至るところにみられたそうですが、宅地などの開発とともに湿地は少なくなり1990(平2)年頃には見かけなくなったそうです。

トリカブトなど毒草が多いキンポウゲ科の中で、リュウキンカは、ニリンソウやバイカモとともに食用となる数少ない種類です。同じ仲間リュウキンカよりやや大きく、北海道や本州北部に分布する変種のエゾノリュウキンカはヤチブキといい、よく食べられたそうです。また、茎が直立しない変種のエンコウソウ(猿猴草)は観賞用に植えられています。



水辺に咲くリュウキンカ (写真1)



花 (写真2)



袋果 (写真3)

参考文献

- ふるさとの自然 第12号、宮城県(環境保全課)、1990
- 宮城の野草、河北新報社、1992
- 宮城県の希少な野生動植物 普及版、宮城県、2002
- 山に咲く花 山溪ハンディ図鑑2、山と溪谷社、1985

【地域支援部 梅田 久男】

★ 新緑の林に鳥のにぎわい

暖かくなり、鳥たちも子育ての季節に入りました。さえずりが響き、にぎやかな林になっています。鳥たちは林業技術総合センター（以下、センター）のどんな場所で子育てをしているのでしょうか？

鳥の種類によって巣の形や大きさ、子育ての場所はさまざまです。また、巣材や巣の構造なども異なり、鳥の巣図鑑などでどの種類の鳥が巣を作ったのか調べることも可能です。

今年の冬に当センターの樹木見本園で巣を見つけました（写真1）。雪の重みで木から落下したようです。おおよその大きさを測ってみると、巣の外径が15cm、内径が7～8cm程でした。巣材は木の枝や蔓、枯れ草などが利用されています。このような巣を作る鳥は何種類かいますが、大きさや巣材の種類から、ヒヨドリの巣ではないかと推測できます。樹木見本園のメイン道路脇にあるミズナラの木で子育てをしていたようで、葉が茂っている季節には気がつきませんでした。

他にもセンター内の車庫からは頻繁にヒナの声が聞こえ、スズメの親がすきまから出入りする様子が観察されたり、シジュウカラやウグイスの声が響いたりしています。スズメは木の洞や巣箱、建物のすきまなどを利用して子育てをします。シジュウカラも同様で、時にはあまり使っていない郵便箱や電柱のカバーなどで巣を作ることもあります。また、ウグイスやヤブサメなど藪の中で子育てをする鳥たちもいます。これらの種はきれいに下刈りされた公園のような環境では子育てができません。

さまざまな種類の鳥たちが子育てを行うためには、林、藪、大きな木、ちょっとした人工物など多様な環境が必要です。また、ヒナの食べ物となる他の生物が豊富でなければ子育ては成功しません。センターの周辺は人為的影響が強い環境ですが、これらの条件を満たし、多くの鳥たちに子育ての場所を提供していると考えられます。

鳥たちは人間にみつきりにくい案外身近な場所で、子育てをしているものです。その巣から巣立ったばかりの幼鳥は、まだ上手く飛べません。簡単に人の手につかまってしまうこともありますが、周辺に親や兄弟がいる可能性も高いので、保護せず、周辺の木の枝に止まらせたり、安全な木の陰に放すなどの手助けをして、親鳥との再会を促しましょう。

日本鳥類保護連盟 HP「ヒナを拾わないで！」

<http://www.jspb.org/hina/hina.html>



写真1 センター内で拾った巣



ヒヨドリの巣とヒナ。営巣中の枝を伐採したり、巣ごと落ちてしまった場合は、できるだけ元の巣の近くに巣を固定します。親鳥が子育てを再開する可能性があります。



保護されてしまったヒヨドリの巣立ちヒナ。ケガもしておらず、元気です。飛ぶ練習中です。

【環境資源部 佐々木 智恵】



楽/学広場

センター主催の各種イベントや研修会の開催結果、今後の開催予定などをご紹介します。

★ 各種イベントを開催します

森林(もり)は、林産物を提供してくれるだけでなく、様々な自然災害から私たちの命を守り、多様な生物を育み、さらには生活に豊かさと潤いをもたらしてくれています。一昨年の大震災の際にも、防災などに果たすその大きな役割が改めて注目されました。

当センターでは、多くの県民の皆様へ森林の重要な役割やその育成産業としての林業についての理解を深めて頂くため、関係団体やNPO等とも連携しながら、森林・林業の啓発に向けた様々なイベントを開催しています。

詳細は、県政だよりやラジオなどを通じてお知らせしますので、皆様も機会があれば是非ご参加ください。今回、イベントの一部をご紹介します。

◎ 親子森林教室を開催します

親子で一緒に森や木に親しむ機会を持っていただくため、毎年夏休みの時期に開催しています。メニューは参加してからのお楽しみですが、スギ板で本箱などを作る「木工教室」や小枝・木の実などを生かした「ネイチャークラフト」、「樹木博士になろう(自然観察)」等が人気です。今年も夏休み始めの7月末に開催しますので、皆さんも是非挑戦してみてください



木工教室



樹木観察

◎ 研究施設や試験林を一般公開します

当センターは、木材やキノコ、森林昆虫、野生鳥獣、さらには林木の品種改良など森林・林業に関する様々なテーマについて試験研究を行っています。これら研究の様子や成果を県民の皆様にご紹介する機会の一つとして、施設公開を行っています。当日は、実験室や試験機器など普段は中々お目にかかれないところをご覧になれます。また、クリネックススタジアム宮城 20 個分にもなる広大なフィールドには色々な林木・植物が多数植栽されており、自然を観察しながらの散策には最適です。例年、木々が美しく色づく頃に開催しますので、新聞や当所ホームページからのお知らせをお見逃しなく。



研究の紹介



ネイチャークラフト



見本園を散策

【企画管理部 松野 茂】

★ 平成 25 年度人材育成研修のあらまし

当センターでは、森林・林業・木材産業で活躍する人材の確保・育成を図るために、様々な森林環境や施設を活用しながら、各種研修会の開催及び関係機関が開催する講習会等の支援を行っています。

平成 24 年度は 60 名の方々がセンター開催の研修等を修了し、各地域において、様々な立場で活動しています。平成 25 年度も多くの受講生が集まり、和やかな雰囲気の中で研修が実施できるよう、関係機関と連携しながら人材育成に努めてまいります。

地域を支える林業技能者を育成する研修

効率的な木材生産や森林整備の団地化等をコーディネートできる人材、集約化施策を実践する地域リーダーなど、高度な知識と技能を有する次世代を担う林業技術者等を育成します。



トータル・コーディネーター育成研修

センターを活用した森林・林業の基礎研修

一般県民に対し、里山林の管理方法や道具の使い方等の基礎講座を開催し、林業後継者や新たに林業事業体に従事した方々を対象に森林・林業・木材産業等に関する基礎的知識・技術を講習します。



里山林の管理基礎講座

センターが支援を行う研修

新規就業者の参入促進を図るために、宮城県労働力確保支援センター等が主催する人材育成研修や林業の基礎知識と技能を学ぶ講習会を支援しています。



林内作業車の操作実習

研修の名称		目的等	予定対象者・スケジュール等	
林業技能者を育成する研修	トータル・コーディネーター育成研修	経営感覚と現場管理能力に優れた林業事業体職員の育成	林業事業体中堅職員 [20人]	6～1月 12日
	宮城県森林施業プランナー育成研修	地域森林の持続的な管理経営に向けた施業提案や森林施業を計画・実行できる地域リーダーの育成	林業技術者 [14人]	9～2月 各 2日
センターを活用した研修	林業教室	林業関係に新たに従事するために必要な基礎知識と技術の習得	林業後継者等 [10人]	5～10月 10日
	市町村等担当職員研修	林業情勢と基礎的知識の習得	市町村・森林組合職員 [10人]	6月 2日
	里山林の管理基礎講座	森林整備に関するボランティア活動を行うための基礎知識と技能の習得	一般県民 [15人]	10～11月 4日
センターが支援する研修	◇林業就業・雇用講習 ◇林業就業支援講習 ◇林業技術講習会 ◇フォレストワーカー研修 [緑の雇用] ◇森林作業道開設オペレーター育成研修		林業就業希望者、 林業研究会員、林業技術者、 林業事業体現場技術者	

【普及指導チーム 皆川 隆一】



職員面々

平成 25 年度からセンターに初めて配属となった職員を紹介します。



【総務 角屋 ひとみ】

4月から、林業技術総合センター勤務となりました。
初めての農林水産部・試験研究機関ということで業務内容に興味を持ちつつも、かなりのブランクがある庶務事務で異動早々システム相手に四苦八苦の毎日・・・一日もはやく、敷地内の研究棟や農場を回れる余裕を持つことが目下の目標です！
どうぞよろしくをお願いします。



【企画管理部 河部 恭子】

4月から研究員として当センター企画管理部に配属になりました。担当は「海岸林造成に向けた広葉樹の育苗技術に関する研究」と「里山広葉樹林の管理技術に関する研究」です。初めての研究業務で不安もありますが、大衡村の自然を満喫しながら取り組みたいと思います。被災した海岸防災林の再生と県土保全の推進のため、微力ながら貢献したいと思いますのでどうぞよろしくをお願いします。



【地域支援部 渡辺 広大】

4月から林業技術総合センター地域支援部に配属になりました。前職場での許可業務から一転、当センターではキノコ栽培試験や林内の放射性物質測定調査を担当することになり、日々勉強に明け暮れています。
心身の健康第一でがんばります。よろしくをお願いします。

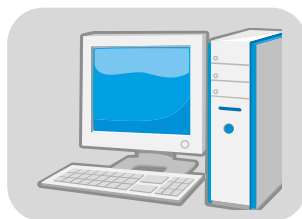


【企画管理部 大内 環】

4月から県職員として採用され、林業総合技術センターに配属となりました。何も分からず不安に思いながら入所しましたが、諸先輩方が温かくご指導して下さい、少しずつ環境に慣れてきたところです。今はまだ何もできませんが、自分の仕事も含め、色々なことを見て聞いて学びながら、信頼されるような職員になれるよう精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

宮城県林業技術総合センター

〒981-3602
黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14
TEL022-345-2816 FAX022-345-5377
<http://www.pref.miyagi.jp/stsc/>



メッサ(METSA)とは・・・
森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。